

# 日本の地下水が危ない

橋本 淳司著

「水と安全はタタ」とは、平和と経済的繁栄に浸っていた日本を象徴するフレーズだが、「安全」神話の崩壊については阪神淡路大震災、オウム事件から今日の原発事故に至る社会を振り返るまでもない。ならば水はどうだろう。日本は島国ながら豊かな森林に恵まれ、上質な湧き水や地下水源に恵まれているはずでは？ 確かに、手入れの行き届かなくなった山林を中国はじめ外国資本が買い漁っているとの報道は最近よく見聞きする。これを新たな対中摩擦、と断じてしまつと問題の本質が見えなくなってしまう。

最近ほめつきり水道水を飲まなくなったが、日本ではペットボトル水よりも清潔な水道水をトイレなどの生活排水として使ってしまった。また、過剰な地下水の汲み上げも以前から

## 豊かな水は誰のものか

社会問題化していた。では地下水はどこから来るのか。これは大地に降った雨が森林に蓄えられ、あるいは水田に張られている間に地下に浸透して水脈となる。この地下水が地上に現れるには数十年から数百年の時間がかかると言われている。ならば私たちが文字通り「湯水の如く」利用している地下水は過去の蓄積なのであり、戦後の数十年間だけを考えても、いったいどれだけの水田が潰され、豊かな雑木林が保水力の弱い植林に代わっていたかを考えた時、背筋に冷たいものが走らないだろうか。

本書は日本の水資源が置かれている問題を多角的に分析し、単なる外国資本の排除や植林活動を進めれば問題解決、とはならないメカニズムを丁寧に解説している。米食をパン食、肉食に転換すればより多くの水資源を要することは知られているが、本書ではそれを「仮想水」として科学的に裏付けている。また、水田は減反ではなく稲作によって将来への地下水づくりに貢献できることを説く。

読者はあらためて涵養という言葉が、未来の世代の水資源を育むことに他ならないことを知るだろう。

（中尾清一郎・佐賀新聞社社長）



（幻冬舎新書・819円）

はしもと・じゅんじ 1967年  
群馬県生まれ。主に水問題をテーマに執筆と講演活動を行う。アクアス  
フィア代表